

2024 年度（令和6年度）学校評価自己評価表

校番 1	福山市立鞆の浦学園
最終更新日	2025年（令和7年）3月10日

Ⅰ 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の理念のもと、各中学校区・学校は「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ 自 校

前年度学校運営協議会の主な内容		育成する力 (21世紀型 “スキル&倫理観”)		① 課題発見・解決能力 ② 情報活用能力 ③ コミュニケーション能力 ④ 郷土愛
・学校が進めている取組内容については、概ね肯定的評価をいただいた。 ・開校 5 年目も、児童生徒の成長のため義務教育学校ならではの取組を積極的に進めていくことを期待される。		めざす 子ども像	①	・物事を多面的に見たり、これまでの経験や知識を活用したりする中で、新たな課題を発見することができる。 ・多様な他者と協働したり、よりよい解決方法を選択したりすることで目的に応じた納得解を導き出したり実行したりすることができる。
ミッション			②	・適切かつ効果的な情報を収集できる。 ・収集した情報を分類・整理・比較・関連付けて、目的や意図に応じて適切かつ効果的にまとめることができる。 ・多様な他者を相手とし、情報と関連付けてより効果的な方法で発信できる。
義務教育 9 年間の一貫した教育を推進し、将来の日本やふるさと福山を支え貢献する人材を育成する。			③	・多様な他者と互いに考えを認め合いながら、協働することができる。 ・多様な他者と協働することで新たな考えを創造し、適切かつ効果的な解を導き出すことができる。
学校教育目標			④	・鞆のよさや課題を理解した上で、解決策を考えることができる。 ・世界的な視野で、鞆のよりよい町づくりに貢献できる。
郷土福山を愛し、心身ともにたくましく意欲を持って主体的に学ぶ子どもの育成 ～ ふるさととの自然、人、歴史、伝統、文化に触れながら、学びをつなぎ深める ～				
現 状		研究	主題 内容等	「教科・学年の枠を超えた 9 年間の一体的な教育内容と教育体制の確立」 ～「探究」の世界にどっぷりつかるとつながる！つなげる！発信する！～ ・「個人テーマ」を設定し、一人一人の学ぶ意欲が高まる授業を探究する ・「鞆学」「自立・生単」を軸に、子どもの学びと体験がにつながる授業を探究する 学びの土台 ・学校と家庭の学習・生活を繋ぎ、全ての活動に根づく主体性と責任感 ・学園会作成の「幸せの道」を踏まえ、安心して学べる共感・支持的文化
<児童生徒> ・「ふるさとが好きである」児童生徒の割合 95.4% ・「自分の考えは認められている」88.7% ・福山ブランド「鞆学」を中心に、子ども達は意欲的に学びながら自分達のやっていることを積極的に発信する姿が多く見られた。 <授業> ・「学級は安心して学べる場である」92.3% ・「学校での学びはよく分かる」94.8% 「考えることは面白い」88.1% ・「探究することが大好き」89.6% ・「鞆学」を中心とした学習を外部に発信したり、校内で交流したりしていくことで、探究学習への意欲を高めることができた。 ・「幸せの道」について、学園会や学級・委員会で考える時間を積極的に確保することで、これまで以上に安心して学ぶことのできる学園になってきている。				めざす授業の姿

Ⅲ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立鞆の浦学園

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 評	成 達 成 評	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 評	成 達 成 評	総合 評価	改善方策
3	夢と志を育み、可能性に挑戦するための意欲と学び続ける力を付ける。	★	継続	児童生徒一人一人の学びを最大限に引き出し、一人一人が自らの伸びや成長を実感できる。	- 外部人材を積極的に活用しながら、学力向上取組シート、体力向上計画の取組内容を定期的に検証・発信する。 「幸せの道」の取組内容をさらに深めるため学級、学園全体で絶えず議論・交流・発信を続ける。	- 児童生徒アンケート「学びは楽しい」「体を動かすことは楽しい」の肯定的評価85%以上 - 児童生徒アンケート「学級は安心だ」「自分の考えは認められている」の肯定的評価85%以上	□全学年、学期に1回以上、外部人材を活用し、学びを深めた。 ・アンケート「学びは楽しい」89% 「体を動かすことは楽しい」91% □学園会の呼びかけを中心に各学級、委員会「幸せの道」について考えた。 「学級は安心」86% 「考えは認められている」84%	4	4	- 学校運営協議会委員や外部人材を探究の取組発表の場だけでなく、ゲストとして招き、探究サイクルに還元していく。 - 各クラスや委員会で「幸せの道」の振り返りや見直しを月に一度は行う。児童生徒の幸せのために、学年を越えて議論する場を設定する。新学園会の発足と同時に各委員会で「幸せの道」について自分たちでできることを考え交流した。	□必要に応じて外部人材を招き、児童生徒の学びを深めることができた。 「学びは楽しい」86% 「体を動かすことは楽しい」94% □新学園会の発足と同時に各委員会で「幸せの道」について自分たちでできることを考え交流した。 「学級は安心」93% 「考えは認められている」95%	4	4	4	- 外部講師による職員研修を企画し、授業スキルや教材研究の方法について学びを深めていけるようにする。 - 各委員会で話し合ったことが全体に伝わるように新たに代表委員会を開き、今まで以上に児童生徒が主体的に考え・行動できる活動を増やしていく。

3	「ふるさと鞆・福山」への愛着と誇りを育み、よりよい町づくりに貢献できる。	★	継続	よりよい町づくりを、SDGsとキャリア教育を関連付け考えて、活動を選び行動できる。(自己選択・決定)	・ふるさとをテーマに課題発見・解決学習を進め、取組や学びを積極的に発信する。	・児童生徒アンケート「ふるさと大好き」「SDGs達成に貢献している」の肯定的評価 85%以上	☐ 地域の一員として「鞆学」を中心に、より良い町づくりを進めることができた。 「ふるさと大好き」 93% 「SDGsに貢献している」95%	4	4	・子ども達がそれぞれの探究に達成感を得られるように、校内研修を実施して価値づけの方法など手立てを探す。	☐ 校内研修で手立てを考え、好きを大切に活動を進めた。 「ふるさと大好き」 97% 「SDGsに貢献している」 93%	4	4	4	・引き続き前期と後期の連携を大切にしながら、今年度の取組を継続していく。
3	「学校における働き方改革取組方針」を踏まえ、子ども達と共に自ら挑戦し続ける。	★	継続	個人テーマを設定して自らの強みを活かし、年間を計画的に業務遂行する力を付ける。	・「学びが面白い」の深化をめざし、取組の質を高める具体策を実践交流・発信する。	・児童生徒アンケート「探究大好き」の肯定的評価 85%以上	☐ 子ども達の自己選択・自己決定を大切に探究することができた。「探究大好き」 88%	4	4	・一人での学びが苦手な子ども達には、丁寧に面談や支援を行っていく。	☐ ゴール設定と興味関心を大切に面談を行った。 「探究大好き」 89%	4	4	4	・子どもが探究を進められるテーマ・問いの立て方を学び、課題を深める学びを推進する。
3	「学校における働き方改革取組方針」を踏まえ、子ども達と共に自ら挑戦し続ける。	★	継続	個人テーマを設定して自らの強みを活かし、年間を計画的に業務遂行する力を付ける。	・「学びが面白い」の深化をめざし、取組の質を高める具体策を実践交流・発信する。	・教職員一人一人がやりがい感を持ち自らの成長記録を手に入れている。	☐ 研修を通して個の実践や児童生徒の課題などを交流し、2学期の方向性をまとめた。 100NENアンケート「仕事にやりがい」100%	4	4	・互いの授業を見合う場を設定する。子どもの課題を解決できる学びを充実させていく。	☐ 研究授業を行い互いの授業を見合う場を設定した。知的な学びの楽しさを追求していく。 100NEN アンケート「仕事にやりがい」100%	4	4	4	・「個別最適・協働的」な学びの考え方をベースとし、研修したことを積み上げていく。
					・定時退校日の推進と業務内容の改善を進め、見通しが持てる業務管理を進める。	・全職員が、時間外勤務1ヶ月45時間以内、年間360時間以内	☐ 主任主事を中心に計画的に校務を遂行し、45時間以内の職員は、98%であった。			・引き続き、計画的な校務で見通しがもてるようにし、子どもと向き合う時間を確保する。	☐ 時間外勤務が月に45時間以内の職員は100%であった。				・前年踏襲で行事・授業を計画するのではなく、子どもにとって必要な学びを計画・実施していく。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。